

令和7年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859)

東国の^{うらない}トを伝える和歌 —武蔵御嶽神社瑞垣内の万葉歌碑—

武蔵御嶽神社の御本殿周囲は瑞垣内^{たまがきない}と呼ばれ、とくに清浄な状態を保つように管理されています。この区画には常磐堅磐社^{ときわかきわしゃ}をはじめとした摂社、末社が鎮座していますが、他にいくつかの石碑を見ることができます。この中に『万葉集』に収録された和歌が刻まれた歌碑があります。

[歌碑表面(碑文は縦書きで、原文のまま掲載しています)]

万葉集卷六八十四葉

武州比企郡□

□□□□□

武蔵野尔宇良敝可多也伎麻左氏尔
(武蔵野にうらべかたやきまさてに)

田中 □□
金井 □五郎

世話人

毛乃良奴伎美我名字良尔低尔家里
(ものらぬきみがなうらにでにけり)

服部 常磐
片柳 正砥

發願主

明治八乙亥年六月 □□書

片柳 初穂

『万葉集』はわが国最古の歌集で、奈良時代中期ころまでに詠まれた和歌4,500余首が収められています。和歌を詠んだのは歴代の天皇や皇族、貴族達をはじめ、辺境の地の警備にあたった防人^{さきもり}や民衆にいたる古代の人々でした。和歌の多くは当時都があった奈良の地で詠まれています。『東歌』^{あずまうた}と呼ばれ、東国地方で詠まれた和歌も収められています。『万葉集』の和歌は、日本の古代の姿、当時の人々の様子を現代に伝えています。

この歌碑は万葉仮名で刻まれています。現代の漢字と平仮名で和歌を表すと「武蔵野にト部肩焼きまさてにも告らぬ君が名トに出にけり」となり、意味は「東国の武蔵野ではト部が鹿の肩の骨を焼きうらないを行うというが、まだ誰にも話していないあなたの名前がうらないにあらわれてしまった」となるのでしょうか。千年以上も前の遙か昔に、この武蔵野の地では動物の肩の骨を焼き、うらないが行われたことを知ることができます。

武蔵御嶽神社では毎年正月3日に「太占祭」^{ふとまにさい}という祭りが行われています。「太占」^{ふとまに}とは

神意を問ううらないの事です。境内地の斎場において鹿の肩甲骨を斎火にて焼き、生じたひび割れの具合により、農作物の作柄の吉凶がうらなわれます。御岳山には多くの神々が祀られていますが、主祭神として御祀りされているのは、櫛真智命^{くしまちのみこと}で太占を司る神です。御祭神にゆかりある太占がこの地で行われていることを参拝者に知らせるために、この歌碑は境内地に建てられたようです

建立は明治8（1875）年とありますが、和歌の字を揮毫した人物の箇所は、摩耗とコケ類の付着のため判読できません。また下段の建碑にかかわった人物のうち、世話人と発願者は判読が可能で、当時の御岳山の人々であることが解りますが、右側の人物名等は摩耗のため判読が難しくなっています。

『万葉集』の他にも現存する国内最古の書物である『古事記』には、太占として鹿の骨を桜の木で焼く記述があります。また考古学資料として、奈良県の唐古・鍵遺跡（弥生時代）をはじめ、国内の古代の遺跡からうらないに用いられた形跡のある鹿や猪等の肩甲骨

が出土しています。古代の人々は神意を知るすべを得ていたのでしょうか。

鹿の肩甲骨による太占は、武蔵御嶽神社の他、近隣では鹿占神事として群馬県富岡市の一宮貫前神社^{ぬきさきじんじゃ}に伝わります。また東京都あきる野市の阿伎留神社^{あきるじんじゃ}に伝わる「年中十二祭事絵巻 狩野谿運久信筆」には、「十月肩灼神事」として鹿骨を焼く様子が描かれています。このように東歌に詠まれた鹿骨によるうらないが、神事として現代に残されています。



参考文献

文化庁文化財保護部「鹿占習俗」（昭和 59 年）

万葉歌碑

高さ	1 3 3 c m
幅	6 2 c m
厚さ	2 7 c m

※高さ約 1 m の石垣の上。

（文責 黒田 耕）